

5. 大形住居跡

C地区において、長径12mをこえる大形住居跡（CH-2）が発見された。これは、他の住居跡と比較すると、立地、構造、出土遺物などに特異性がみられる。以下に、それらの点について詳細に述べ、C地区の住居跡群のなかでの位置づけを考えてみたい。

1) 立地

CH-2は、緩やかな斜面の南東側先端部に独立して存在する。ここはC地区の中では、最も礫の少ない場所で、発掘期間中の降雨被害もほとんど無かった。その周囲には、礫の少ない空間が広がるにもかかわらず、他の住居跡は、斜面上部の礫の多い部分に集中している。CH-2の周辺は、構造物を設置してはならない特殊な場であったのだろうか。

2) 建て替え

CH-2からは、石組み炉3と柱穴52が確認されている。炉の石組みの残存状態からS-3→S-2→S-1の変遷が想定され、柱穴の上に焼土が堆積している例があることから、これらは、すべてが同時に存在していたものではない。千歳6遺跡における竪穴住居跡の分析⁽¹⁾を参考にしながらCH-2の構造の変遷をたどると以下のようになる。

南側の壁ぎわにある2ヵ所の傾斜した柱穴を規準にして、住居跡の長軸に対して対称の位置にある柱穴を探すと破線で結ばれる柱穴列がうかんできく。これは住居跡の輪郭とよく一致し、かつその長軸線上にS-1が位置することから、最終段階のものとみてよいだろう。

次に、S-2の長軸の延長線に対して同様の手順で関連する柱穴を探すと一点鎖線で結ばれる柱穴列となる。この柱穴列から想定される住居跡の平面規模は、長径9～10m程度とみられる。

3) ベンガラとフレイクの出土

他の住居跡には見られないベンガラ塊が3点とフレイクの集中地点が3ヵ所発見された。ベンガラは、覆土と床面直上から小塊が、S-2に隣接するP-10の床面から拳大のものが出土している。一般にベンガラは、墓に散布されることが多く、特殊な土器に塗彩されたりすることから、葬送・祭祀に深いかわりをもつものと考えられている。このことから、CH-2の機能については、祭祀的な様相も考慮すべきものだろう。フレイクは、S-1とF-2の周辺及び住居跡の北側から集中して出土している。石器製作の場とみてよいだろう。また、3ヵ所のうち2ヵ所までが炉跡や焼土と接近していることから、火との結びつきが考えられる。

4) まとめ

いわゆる大形住居跡の機能について、渡辺誠・中村良幸氏らによって「雪国の共同作業所説」「集会所・公民館説」「祭祀遺構説」等⁽²⁾の諸説が発表されている。CH-2の調査結果は、以上の説のいずれについても否定するものではない。大形住居跡にはしばしば増築の形跡のみられるものがあるが、CH-2の柱穴分析からもその可能性を指摘することができた。複数の炉をもつ点についても同様である。さらに、ベンガラが出土していることから、祭祀遺構の可能性

についても十分吟味する必要があるだろう。

道内では、苫小牧市の美沢2遺跡に円筒土器を出土した大形住居跡の調査例⁽³⁾があるが、今のところ類例は少ない。登別市の千歳6遺跡⁽⁴⁾では住居跡19のうち最大のものは、長径が11mあり、平面的な規模はCH-2に近い。北海道の大形住居については、今後類例の増加をまって検討したい。

- (1) 瀬川拓郎昭和57年「千歳6遺跡における竪穴の構造と集落の変遷」『札幌台地の縄文時代集落址』登別市教育委員会
- (2) 渡辺誠 昭和55年「雪国の縄文家屋」『小田原考古学研究会会報』第9号
- (3) 北海道教育委員会昭和53年『美沢川流域の遺跡群 II』
- (4) (1)に同じ

